19世紀アメリカ英語における間接受動文について

Indirect Passive in 19th Century American English

藤　内　響　子

I

'give' や 'send' のようないわゆる授与動詞には3種類の受身文が考えられる。例えば、She sent him a long letter の受身文は(1)のようになる。

(1) a. He was sent a long letter.
　　b. A long letter was sent to him.
　　c. A long letter was sent him.

(1)の3つの受身文のうち、1a は間接目的語を主語に取る構文であり、1b および1c は直接目的語を主語に取る構文である。それぞれ、主語にならなかったほうの目的語は、保留目的語として文中に残る。このうち、1b と1c 関して、いくつかの文法書間で意見の対立が見られるため、藤内（2001）で調査したところ、次のようなことがわかった。1950年以降の数十年で、特に1c 型が置かれた状況に変化が生じ、その変化に対して1a 型が深く関わっている可能性がある、ということである。19世紀以降のアメリカ英語における1a 型の変遷、および、イギリス英語における3型の状況について調査する必要が出てきた。そこで、本研究ノートでは、研究の前段階として、まず19世紀のアメリカ英語における、1a 型の状況を調査してみた。

調査に用いたテキストは、19世紀から20世紀初頭までの合計21点である。(2)に刊行年代順に挙げる。

(2)

Irving:	*The Legend of the Sleepy Hollow* (1819-1820)
Poe:	*The Fall of the Home of the Usher* (1839)
Emerson:	*The Young American* (1844)
Hawthorne:	*The Scarlet Letter* (1850)
Melville:	*Moby-Dick* (1851)
Thoreau:	*Walden, or Life in the Woods* (1854)
Stowe:	*Uncle Tom's Cabin* (1852)
	Soujourner Truth, The Libyan Sibyl (1863)
Alger:	*Ragged Dick and Struggling Upward* (1868)
Alcott:	*Little Women* (1868)
	Good Wives (1869)
Twain:	*The Adventure of Thomas Sawyer* (1876)
	The Adventure of Huckleberry Finn (1884)
Burnett:	*Little Lord Fauntleroy* (1886)

	The Little Princess (1888)
Bierce:	*Can Such Things Be?* (1893)
Crane:	*The Red Budge of Courage* (1895)
H.James:	*Turn of the Screw* (1898)
Chopin:	*The Awakening* (1899)
Dreiser:	*Sister Carrie* (1900)
London:	*The Call of the Wild* (1903)

調査した動詞は、授与動詞のうち、間接目的語を文末に移動した場合に to を要求するものであり、A.S.Hornby: *A Guide to Patterns and Usage in English* 等を参考にして選んだ。本調査の結果と藤内（2001）の調査結果をまとめ合わせたものが(3)の表１である。括弧内の数字は、保留目的語が代名詞である例を示している。

(3)

表１	1a 型	to あり(1b 型)	to なし(1c 型)
Afford	0	0	3(3)
allot	0	3(2)	0
allow	7	1(0)	4(1)
award	0	0	0
bring	0	4(4)	2(2)
deny	7	3(2)	3(3)
do	1	1(0)	3(2)
fetch	0	0	0
forbid	0	0	0
give	8	38(13)	22(21)
grant	0	1(1)	1(1)
hand	0	4(2)	2(2)
lend	0	2(2)	0
offer	4	2(1)	3(3)
owe	0	0	0
pass	0	1(0)	0
pay	0	1(0)	0
permit	0	0	1(1)
proffer	0	0	0
promise	1	0	0
read	0	0	0
refuse	0	1(0)	0
render	0	0	1(1)
restore	0	5(4)	0
sell	0	7(1)	0
send	0	12(5)	2(2)
show	2	0	1(1)
spare	5	1(0)	1(1)
teach	8	0	2(2)
tell	29	1(0)	2(2)
write	0	1(1)	0
計	72	89(38)	53(48)

現在では、３種類の型の中で最も自然な形とされている1a 型は、他の２つよりも遅れて登場し、17、８世紀から良く使われるようになったとされている。表を見てみると、1a 型が19世紀の段階ですでに他の２つと遜色なく使用されていることがわかる。また、動詞によってどの型を好むかが、ある程度見て取れるのも興味深い。この結果を元に今後は、現代英語での調査およびイギリス英語での調査結果を加えて、歴史的考察を行いたい。

参考文献

（本稿で言及したものに留める）

Hornby, A. S. 1954. *A Guide to Patterns and Usage in English.* London: Oxford Univ. Press.

藤内響子　2001.「19世紀アメリカ英語における “A long letter was sent him” 型構文」九州情報大学研究論集　第３巻　第１号 pp.71-75.